参考資料-2

第２章　札幌市の姿

１．　自然環境・地勢

（１）位置

札幌市は石狩平野の南西部に位置しており、総面積は1,121.26㎢。東京23区の約2倍、香港とほぼ同等の面積を持つ。市域は東西が42.30㎞、南北が45.40㎞、高度は最高地が南区定山渓（余市岳）1,488.0m、最低地は北区西茨戸（旧発寒川付近）1.6mである。

大正11（1922）年8月1日の市制施行以来、近隣町村との合併・編入を重ねて市域を拡大し、現在札幌市に隣接する市町村は後志管内小樽市、赤井川村、京極町、喜茂別町、胆振管内伊達市、石狩管内恵庭市、千歳市、北広島市、石狩市、江別市、当別町の計7市3町1村である。

極東東経141°30′20″、極西東経140°極南北緯42°46′51″、極北北緯43°11′22″、59′26″に位置しており、ほぼ同じ緯度の世界都市はロシアのウラジオストク、カザフスタンのアルマトイ、フランスのマルセイユなどがある。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ
・札幌市景観計画2017／札幌市ＨＰ
・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ
・札幌公式観光サイト　ようこそSAPPORO
・香港基礎データ／外務省ＨＰ
・市区町村別面積／国土交通省ＨＰ

（２）気候

日本海型気候の札幌市は、夏季はさわやかで過ごしやすく冬は積雪寒冷で、四季の変化がはっきりしている。4月下旬から6月は晴天が多く、花が次々と開花する様子がみられる。6月下旬から8月は平均気温が20℃を超える盛夏となるが、湿度が低く朝晩は涼しくなる。9月は気温が下がり始め、10月には紅葉、10月下旬頃には初雪が降る。根雪となるのは12月で、年間平均6ｍの積雪量となる。1月の平均最低気温は-7.0℃で、平均積雪日数は年に125.9日だった(1981～2010年)。3月に入ると寒気が緩みだし、4月の上旬には根雪がなくなって長い冬がようやく終わる。札幌の年間平均気温は8.9℃、年間平均降水量は1,106.5㎜(1981～2010年)である。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ
・札幌市景観計画／札幌市ＨＰ
・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ
・札幌公式観光サイト　ようこそSAPPORO

・札幌平年値（年・月ごとの値）主な要素／国土交通省気象庁ＨＰ

（３）植生

札幌の扇状地には、かつてアイヌ語で湧水という意味の「メム」といわれた跡地があった。その地形を利用し、北海道大学植物園には、地形や植生に人の手を入れないように残した自然林があり、イタヤカエデやオオモミジなど開拓以前の札幌の姿をとどめている。

本市は石狩平野の南西部に位置し、東は石狩川から野幌森林公園にかけての低地帯、西は手稲山系、南は支笏洞爺国立公園に連なる一大山地、北は日本海に接する石狩砂丘地に囲まれた全国屈指の広大な面積を有している。また、人口が195万人を超える大都市だが、都市を取り巻く自然環境は比較的恵まれた状況にある。本市の総面積は、112,126haであり、森林面積は71,180ha、総面積の約 64%を占めている。一般民有林面積は15,195haで、その内訳は民有林13,179ha、市有林が 2,016haとなっている。その内カラマツ及びトドマツを主体とした人工林の面積は 3,890ha であり、人工林率約26%で全道平均より下回っている。

本市の森林は、林業生産活動が行われている人工林の割合が低く、広葉樹が主体の天然林が多い林分構成になっており、森林に対する住民の意識・価値観が多様化し、今日では森林を環境の面からとらえる傾向が強くなっている。

札幌周辺は植物種類が極めて豊富であり、北海道に産する野生種のほぼ半数を見い出すことができる。このように種類が多いのは、札幌周辺の地形・地質が多様で変化に富むこと、植物分布において北方型と南方型の接点に当たっていること、山林の多くが天然記念物、保安林などに指定されていて、開発・破壊から遠ざけられ保護されていることなどが主な理由として挙げられる。

植物帯としては、北海道は針広混交林帯と呼ばれているが、このことは、地理的には温帯と亜寒帯との移行帯であり、森林帯では温帯夏緑林（落葉広葉樹林）と北方（亜寒帯）針葉樹林の併存地帯であることを意味している。その混合割合は一様ではなく、山岳地帯や野幌台地などのやや高い所では、定山渓付近でみられるようなトドマツ、エゾマツなどの針葉樹が多くなり、台地や山ろく地帯ではカツラ、イタヤ類、ナラ類、エゾヤマザクラ、ナナカマド、シラカンバなどの広葉樹の占める面積が多くなる。

市街地の植生は、本州種、外国種、改良品種などが大半を占めている。

低木には、花が美しい花木類と葉色や樹姿の美しいかん木類があり、前者としてはボタン、ツツジ、アジサイや札幌市の木であるライラックなど多くの種類の木が美しさを競っており、後者にはサツキ、イチイ、ニシキギなどが前栽や建物の腰植えなどとして利用されている。

高木は、街路樹・公園などに用いられているが、札幌市では冬季の低温のため広葉常緑の高木が育たない。街路樹としては、約24万本の高木が植えられているが、そのほとんどはナナカマド、ニセアカシアなどの落葉広葉樹である。

札幌市など積雪地帯は多年草の天国といわれ、その種類も非常に多いが、その主なものには、サクラソウ類、シャクヤク、ハマカンザシ、それに札幌市の花スズランなどが挙げられる。花壇用草花としては、春花壇用にはパンジー、ヒナギクなど、夏花壇用にはペチュニア、ベゴニア、サルビアなど種類が多い。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市景観計画2017／札幌ＨＰ

・植物を知る／北海道大学植物園ＨＰ

・札幌市森林整備計画書（平成30年4月1日～平成40年3月31日）／札幌市

・『さっぽろ文庫20　札幌の自然』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

・『さっぽろ文庫38　札幌の樹々』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

（４）地形・地質

札幌市の地形は、南西部に広がる山地、南東部の丘陵・台地、北部の低平地とそこへ流れる豊平川がつくった扇状地の4つから成り立っている。地形の基盤は、中生代三畳紀からジュラ紀の古い火山岩である。

【南西部 山地】

札幌の市域に占める山林の割合は約6割で、藻岩山、円山、手稲山、三角山など標高約200～1,000ｍの山々が市街地を囲んでいる。さらに定山渓、芸術の森などを含み、豊かな森林地帯となっている。

山地は新生代新第三紀・中新世から約2,000万年にわたる火山活動による緑色凝灰岩、火山岩や火山砕せつ岩や泥岩などの堆積で作られ、起伏に富んだ地形を形成している。

【南東部 丘陵地・台地】

山地から南東部に広がった丘陵地は、ゆるやかな波状に起伏し、坂や崖が多い。隆起と浸食などを繰り返し、月寒川や厚別川などの狭長な谷が刻まれた。

新生代第四紀の初め、火山活動により安山岩が噴出し、南東部から東部にかけて台地溶岩地形が作られ、この時札幌岳や空沼岳などが形成されたといわれている。

約3万2,000年前には支笏カルデラ形成に伴う大規模な火山活動により、軽石流が噴出し、大量の支笏軽石流が札幌方面に流下した。この軽石流が凝結したものが、南区石山などに見られる札幌軟石（凝結凝灰岩）と呼ばれている。

【北部 低平地】

新生代第四紀以降、数回訪れた氷河期において、氷期の海の後退と間氷期の海域進出により形成された。石狩市との間には紅葉山砂丘ができ、長い湿地状態による湿地植物の泥炭層を形成した。湿地が広がる石狩平野の一部であり、平均40ｍほどの沖積層が厚く分布した石狩川流域地帯である。

【中央部 扇状地】

南西部山地と南東部丘陵地・台地の間を北部低平地へと流れる豊平川が作った扇状地である。初めに真駒内・平岸方面に流れて旧豊平川扇状地（平岸面）を形成し、その後流路を変えて豊平川扇状地（札幌面）をつくった。洪水や河川によって運ばれ堆積した砂礫層と粘土層が重なってできた地形である。

豊平川扇状地の扇頂は真駒内付近の標高約100ｍ、扇端部の北海道大学、札幌駅付近は標高12～13ｍである。扇端部には、アイヌ語で「メム)」と呼ばれる湧水の跡が数カ所残っており、現在も北海道大学などでみることができる。

豊平川扇状地は肥沃な土地で地下水が豊富なため、札幌市はこの地域を中心に大きく発展し、市域を拡大していった。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市景観計画／札幌市ＨＰ

・札幌市の概況（地域特性）／札幌市ＨＰ

・札幌市環境白書（平成27年度版）／札幌ＨＰ

・『さっぽろ文庫20　札幌の自然』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

・『ウォッチング札幌』札幌地理サークル／北海タイムス社

・

２． 社会的環境

（１）人口

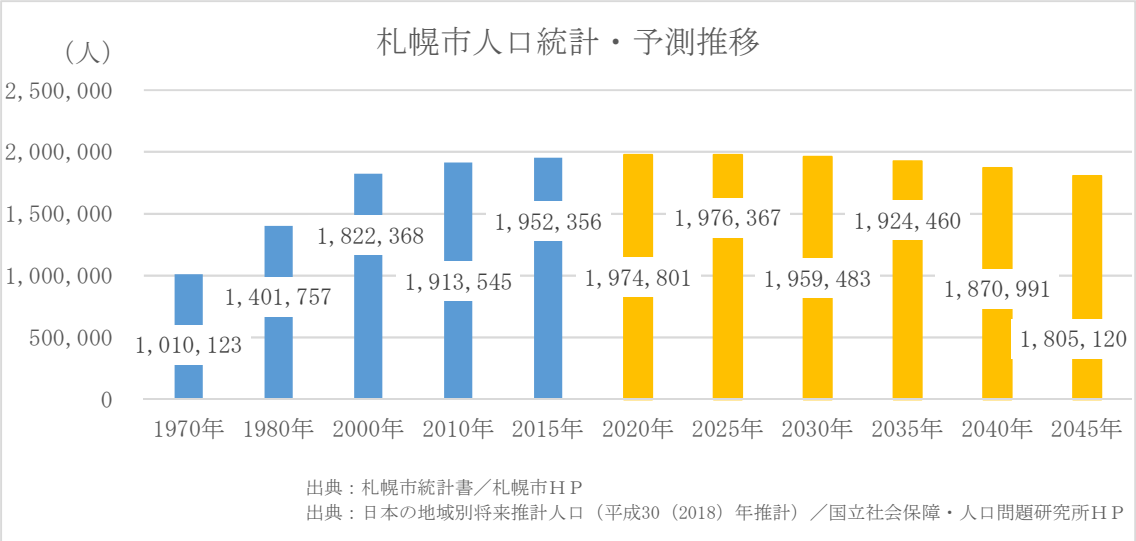
■政令都市・札幌

人口は1,965,784人、952,091世帯（2018年7月1日現在）で、人口規模は全国で5番目（2018年1月1日現在）の日本最北の政令指定都市である。現在札幌市には中央区、北区、東区、白石（しろいし）区、厚別（あつべつ）区、豊平（とよひら）区、清田区、南区、西区、手稲（ていね）区の10の行政区がある。

■今後の予測推移

北海道の総人口が平成9（1997）年をピークに減少している中で、札幌市は小規模ではあるが、いまだ増加傾向にある。しかし、今後札幌市でも人口が減少に転じることが見込まれており、2025年の197万6,367人をピークに2030年には195万9,483人、2040年には187万991人と予測されている。

また、総人口に占める0-14歳以下の人口の割合が2025年に10.5%、2030年には10%、2040年は9.4%と予測され、さらに75歳以上の高齢者の人口の割合は2025年では7.6%、2030年で20%、2040年には22.2%という少子高齢化が進んでいくと考えられる。



＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市統計書／札幌ＨＰ

・第2次札幌市環境基本計画／札幌ＨＰ

・札幌市の概況（地域特性）／札幌市ＨＰ

・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ

・日本の地域別将来推計人口（平成30（2018）年推計）／国立社会保障・人口問題研究所ＨＰ

・札幌公式観光サイト　ようこそSAPPORO

（２）交通

○ 道路交通

■距離・国道

札幌市の道路は平成29（2017）年度現在で国道190.3km、道道239.8km、市道5,274.1kmで、総延長は5,704.2km、舗装率は99.5%である。

札幌市と函館市を結ぶ国道5号や、旭川市とを結ぶ国道12号、室蘭市とを結ぶ国道36号などを有する。

■道路状況

格子状の街中心部を囲むように環状道路があり、さらに環状道路を中心として東西南北に放射道路が広がっている。波状の道路や緑豊かな道路は、札幌市の特徴的な景観を形成しており、主要幹線道路網「2高速・3連携・2環状・13放射道路」の整備を強化していく方針で都市計画を進めている。

2つあるうちの内側の環状道路が最も交通量が多く、次いで外側の環状道路、北方面に広がる放射道路（国道231号）の順に多い。

■自動車保有台数

札幌市内の自動車保有台数は、平成29（2017）年3月現在で102万9,597台という過去最高の台数となっており、6年連続で増加している。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市景観計画／札幌市ＨＰ

・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ

・札幌市の概況（地域特性）／札幌市ＨＰ

・道路建設の歴史／札幌市ＨＰ

・第2次札幌市都市計画マスタープラン（平成28年3月策定）／札幌市ＨＰ

・北海道地区道路情報／国土交通省 北海道開発局ＨＰ

・札幌市燃料電池自動車普及促進計画／札幌市ＨＰ

・札幌市内の自動車普及状況等について／札幌市ＨＰ

○ 地下鉄

■地下鉄の開業

昭和46（1971）年12月に南北線【北24条～真駒内】間の12.1kmが開業し、順に東西線【琴似～白石】、南北線【麻生～北24条】、東西線【白石～新さっぽろ】、東豊線【栄町～豊水すすきの】と【豊水すすきの～福住】、最後に平成11年2月に東西線【宮の沢～琴似】駅が開業した。

■各地下鉄の特徴

南北線は麻生駅から真駒内駅まで全長14.3kmで16の駅があり、最長所要時間は16分。平岸～真駒内駅間にはシェルターで覆われた約4.5kmの高架部があり、地下鉄ではあるが外の景色が見えるという特徴がある。

東西線は宮の沢駅から新さっぽろ駅まで全長20.1km。19の駅があり、最長所要時間は35分で、全線の中で最も長く、駅数も多い。

東豊線は栄町駅から福住駅までの全長13.6㎞で、14の駅がある。

■地下鉄の利用者

1日の平均乗車人数は平成28（2016）年度で、南北線が23万3,749人、東西線が23万4,060人、東豊線は15万2,136人。毎日約62万人が利用していることとなり、各駅とも年々利用者が増えている。

■地下鉄の経営

平成28（2016）年度の収益収支は11年連続の黒字となっており、順調な経営を続けている。

＜参考文献＞

・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ

・地下鉄の路線概要／札幌市交通局ＨＰ

・札幌市の都市交通データ／札幌市ＨＰ

○ バス

■バス事業の歴史

札幌市のバス事業が始まったのは、昭和5（1930）年。市域が拡大され、昭和46（1971）年に地下鉄が開業し、さらに延伸されるのに併せて、バス路線の再編成が行われてきた。しかし、利用者の減少と平成14（2002）年2月からの乗合バス規制緩和実施などにより、札幌市営バスの経営状況は悪化した。民間へ路線を移行した後、平成15（2003）年度末にバス事業を廃止し、74年間の歴史を閉じた。

■現在のバス運営

札幌市内の路線バスは民営の5社（中央バス、ＪＲバス、じょうてつバス、夕鉄バス、道南バス）で運行されている。平成28（2017）年度現在、各民営バス会社が占める1日平均乗車人数の割合は、中央バスが57.6％で半分以上を占め、続いてＪＲバス29.3％、じょうてつバス12.7％、夕鉄バス0.2％、道南バス0.2％となっている。

■バス利用者と今後の状況

1日の平均乗車人数は、平成10（1998）年度で約36万4,000人、平成20（2008）年度では約30万人だった。しかし、平成22（2010）年度以降は30万人をきり、平成28（2016）年度では約29万人となっている。ここ数年はあまり大きな増減はないが、バス事業者は厳しい経営状況を強いられており、札幌市はバス事業者への赤字路線運行の補助など、路線バス維持のための対策に取り組んでいる。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ

・札幌市の都市交通データ／札幌市ＨＰ

・札幌市総合交通計画／札幌市ＨＰ

○ 市電（路面電車）

■市電の登場

大正7（1918）年、開道50年記念博覧会が開催される中、札幌電気軌道株式会社による札幌市内で初めての電車が走った。雪を巻き上げながら走り、冬の風物詩としてしられるササラ電車（除雪車）は、大正14（1925）年に登場した。

■市電路線の拡大と縮小

昭和2（1927）年に札幌市が事業を譲り受け、市営の電車として8系統16.3km、車両数63両で運行を開始。市域の拡大に併せて路線も拡大し、昭和39（1964）年には新琴似駅前方面や円山公園、豊平駅前、苗穂駅前方面の路線も含み、総延長が約25kmにまでなった。

他の交通機関の開業などで乗客の減少による経営状況の悪化も危ぶまれるようになり、次第に路線を縮小していった。西4丁目～すすきの間の1系統8.47km車両数56両となったのは、昭和49（1974）年5月であった。

その後、市電は利用者の増減を繰り返しており、1日平均乗車人数は平成5（1993）年度の2万5,471人を境に年々減少し、平成22（2010）年度は過去最低の2万359人であった。

■市電の高度化と利用者

市電の存続とまちづくりへの活用の検討を図る中、平成25（2013）年に国土交通省によって「札幌市軌道運送高度化実施計画」が認定された。これにより、平成27（2015）年12月20日には路線がループ化（環状化）され、「内回り（反時計回り）」と「外回り（時計回り）」の1系統8.9km車両数33両の運行が始まった。路線のループ化に伴い、市電が歩道のすぐ横を走るため、歩道から直接乗車できる「サイドリザベーション方式」を採用。また、バリアフリー対応の新型低床車両（愛称ポラリス）の導入や停車場の設置などが進められている。

ループ化によるためか、平成28（2016）年度の1日平均乗車人数が2万4,871人となり、平成8（1997）年度と同等の乗車人数となった。

今後も市電の高度化事業と活用計画による経営の安定化が図られていく。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ
・札幌市総合交通計画／札幌市ＨＰ
・札幌市の都市交通データ／札幌市ＨＰ
・さっぽろ歴史ものがたり／札幌市ＨＰ
・札幌市路面電車ループ化後の状況について
・路面電車事業の概要（平成28年4月）／札幌市交通局ＨＰ
・『さっぽろ文庫22　市電物語』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

○ 鉄道

■鉄道の開通

明治 13（1880）年 11 月、北海道の開拓として、石炭を輸送するため、小樽市手宮～札幌間で道内初の鉄道が開通し、明治 15（1882）年 11 月に札幌～三笠市幌内がつながり全面開通した。

鉄道は、明治政府の資金難により民間主導で建設・運営され、道内初の幌内鉄道は北有社が運行、明治 22（1889）年には北海道炭礦鉄道（北炭）が経営することとなった。その後、明治 39（1906）年 3 月に「鉄道国有法」が公布され、明治 29（1896）年 5 月の「北海道鉄道敷設法」により北海道庁が建設・運営を担うこととなっていった。

■国鉄時代

昭和 24（1949）年 6 月に日本国有鉄道（国鉄）ができたが、昭和 62（1987）年 4 月に分割民営化が図られ、ＪＲ東日本、ＪＲ東海、ＪＲ西日本などとともにＪＲ北海道（北海道旅客鉄道株式会社）が誕生した。国鉄時代の赤字路線は廃止され、北海道内の鉄道は縮小されていった。

■札幌駅再開発計画

昭和 63（1988）年、札幌駅、桑園駅、琴似駅が道内で初の高架駅となり、それをきっかけに札幌駅の再開発計画をスタートさせ、平成 2（1990）年、現在 5 代目の駅舎である札幌駅が全面開業した。また、同年から順に商業施設がオープンし、平成 15（2003）年に複合商業施設ＪＲタワーが誕生した。新千歳空港からのアクセスの便利さもあり、札幌駅は国内だけではなく、海外からの旅行客の利用も多い。

■ＪＲ北海道の利用者

札幌市内を走る鉄道は 26 駅あり、ＪＲ函館線の 27.5 ㎞、ＪＲ千歳線の 8.0 ㎞、ＪＲ札沼線 15.1 ㎞、計 50.6 ㎞である。札幌～ほしみ、札幌～森林公園（ＪＲ函館線）、札幌～上野幌（ＪＲ千歳線）、札幌～あいの里公園（ＪＲ札沼線）の 4 路線があり、平成 28（2016）年度の 1 日平均乗車人数は、9 万 7,652 人の札幌駅が道内で最も多く、札幌市内で次に多いのは手稲駅の 1 万 5,589 人、新札幌駅の 1 万 4,267 人であった。

札幌市内全体の 1 日平均乗車人数を見ると、平成 15（2003）年度は 17 万 9,280 人、平成 20（2008）年度は 19 万 4,669 人、平成 23（2011）年には 20 万人を超え、平成 28（2016）年度は 21 万 8,894 人と、年々利用が増加している。

■今後のＪＲ北海道

2030 年度末に全面開業予定の北海道新幹線が開通すれば、さらに利用客が増えるとみられる。しかし、北海道全体の鉄道事業を担うＪＲ北海道の経営状況は依然厳しい状況である。

＜参考文献＞

・札幌市総合交通計画／札幌市ＨＰ

・札幌市の都市交通データ／札幌市ＨＰ

・北海道とともにあゆんだ鉄道の138年／ＪＲ北海道ＨＰ

・ＪＲタワーについて／札幌駅総合開発株式会社（ＪＲ　ＴＯＷＥＲ）ＨＰ

・ＪＲ北海道の経営改善について／国土交通省ＨＰ

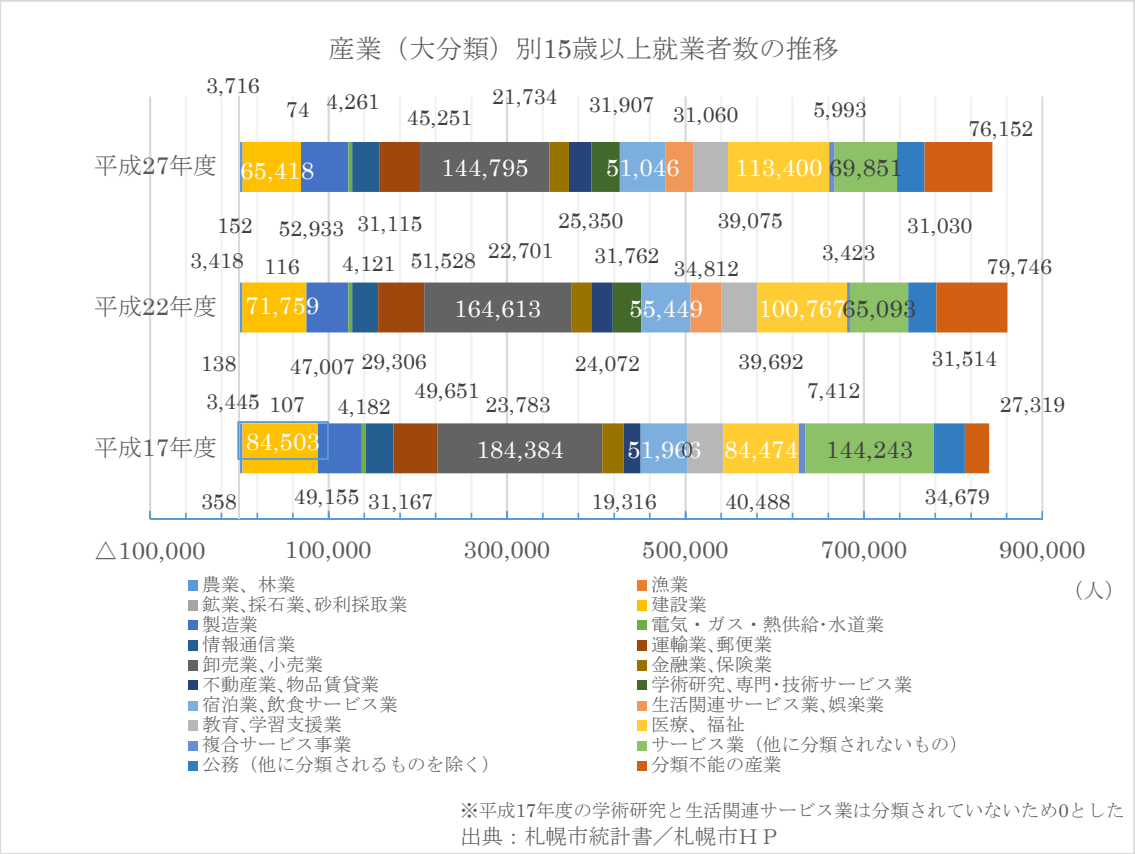
（３）産業

札幌市の15歳以上の産業別就業者の推移を見てみると、卸売業やサービス業などの第3次産業の就業者が多く、農林水産業の第1次産業が最も少ない。

平成22（2010）年度に比べると平成27（2015）年度の第一次産業は、農業・林業就業者が300人ほど増えているが、漁業就業者は3割ほど減ってしまっている。

第二次産業では、建設業就業者が年々減少しており、製造業などは増加している。

第三次産業の総就業者は、5年ごとに1万人以上減少しており、そのなかでも卸売・小売業が年々減少している。不動産業就業者や医療・福祉関係の就業者が増加傾向にある



■産業（大分類）別15歳以上就業者の推移

	第 1 次産業	第 2 次産業	第 3 次産業	分類不能の産業
平成 17 年度	3, 552 人	134, 016 人	675, 745 人	27, 319 人
平成 22 年度	3, 534 人	118, 904 人	658, 853 人	79, 746 人
平成 27 年度	3, 790 人	118, 503 人	645, 868 人	76, 152 人

出典：札幌市統計書（平成29年版）

札幌市内の企業の9割以上が中小企業であり、その札幌の経済を支えているのは「食」「観光」「環境」が重点分野と考えられている。さらに今後は「健康・福祉」も重要な分野の1つに加えられると考えられている。

＜「食」＞

北海道の豊富な食材を活用した安全・安心の確保、食ブランドの形成と地産地消だけではなく道外・海外への進出を図り、魅力のある札幌の産業へと発展している。

第一次産業就業者における高齢化や後継者不足などの課題がある中、第一次産業就業者が北海道の農水畜産物を加工し（第二次産業）、流通・販売（第三次産業）にも関わっていくという第6次産業化への新たな取り組みを進めている。

＜「観光」＞

豊かな緑と新鮮な食材を有する札幌市ではあるが、YOSAKOIソーラン祭りやさっぽろオータムフェスト、さっぽろ雪まつりなどの観光行事がさらに旅行客を呼んでいる。また、ここ数年は海外からの観光客やコンベンションなどが増加し、観光案内所や案内ボランティア、観光案内版の充実を図るとともに、魅力的な観光都市づくりのためのまちづくりを図っている。

＜「環境」＞

平成20（2008）年6月25日、札幌市は地球環境問題への対応を札幌市政の最重要課題の一つと位置付け、札幌市民一人一人がこれまで以上に地球環境保全に取り組んでいくという「環境首都・札幌」を宣言した。

積雪寒冷地である札幌市の市民生活のスマート化、エネルギー分野の活性化などを図る「札幌型環境・エネルギー技術開発支援事業」、企業のエネルギー使用量の削減など「札幌型省エネルギービジネス創出事業」として、環境産業の取り組みを進めている。

＜「健康・福祉」＞

超高齢化社会へと進んでいく中で、障がい、介護等の福祉関連産業だけではなく、スポーツなどの健康への取り組みも重要な分野となっている。

札幌市の豊富な食材を使った機能性食品の開発やサービスの従業者の育成などが必要とされ、札幌市としての支援事業に取り組んでいる。

大学や研究機関との提携によるバイオ産業の発展を図る「バイオ産業販路拡大・連携促進事業」や研究者の育成や支援を行う「健康関連産業研究開発支援事業」、「健康関連産業ビジネスモデル構築支援事業」、「医療関連産業集積促進事業」といった事業を進め、今後の発展へとつなげている。

（参考）

第一次産業：農業・林業・水産業

第二次産業：鉱工業・製造業・建設業

第三次産業：卸売業・小売業・金融業・保険業・不動産業・運輸業

第四次産業：情報産業・ＩＴ・図書館・政府・文化団体など

第五次産業：ＮＰＯ団体・メディア・芸術・ヘルスケア・科学技術など

第六次産業：第一次産業者が第二次（食品加工）・第三次（流通・販売）にかかわる

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市統計書／札幌市ＨＰ

・教えて！さっぽろの産業と経済／札幌市ＨＰ

・札幌市産業振興ビジョン改訂版（平成28～34年度）／札幌市ＨＰ

・国勢調査／札幌市ＨＰ

・市民経済計算・産業連関表／札幌市ＨＰ

・事業所・企業統計調査／札幌ＨＰ

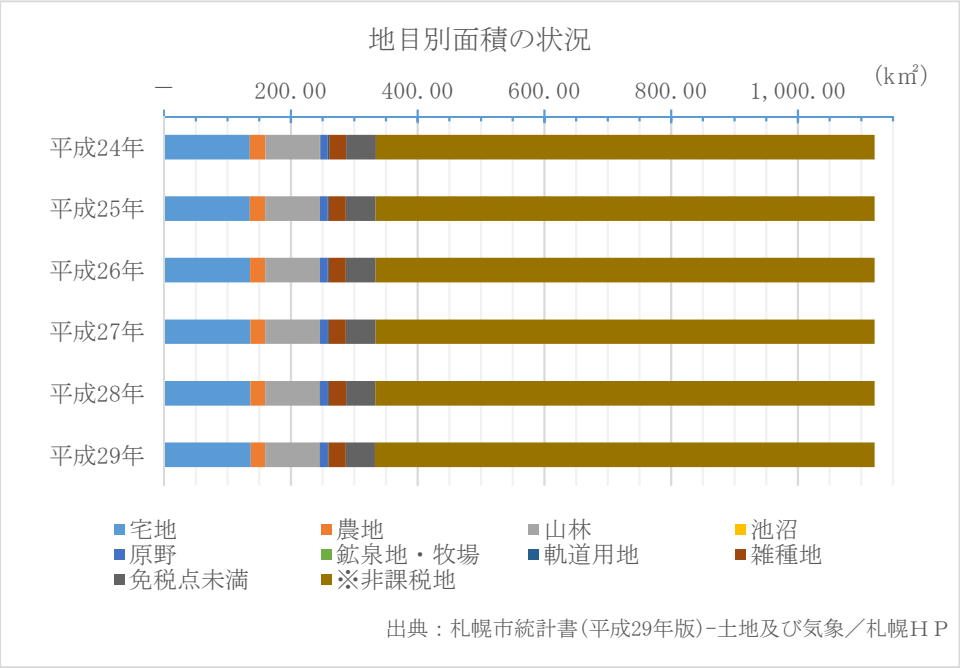
・「環境首都・札幌」宣言／札幌ＨＰ

（４）土地利用

札幌市の土地利用状況を見ると、山林や原野など、豊かな自然が多いことがわかる。

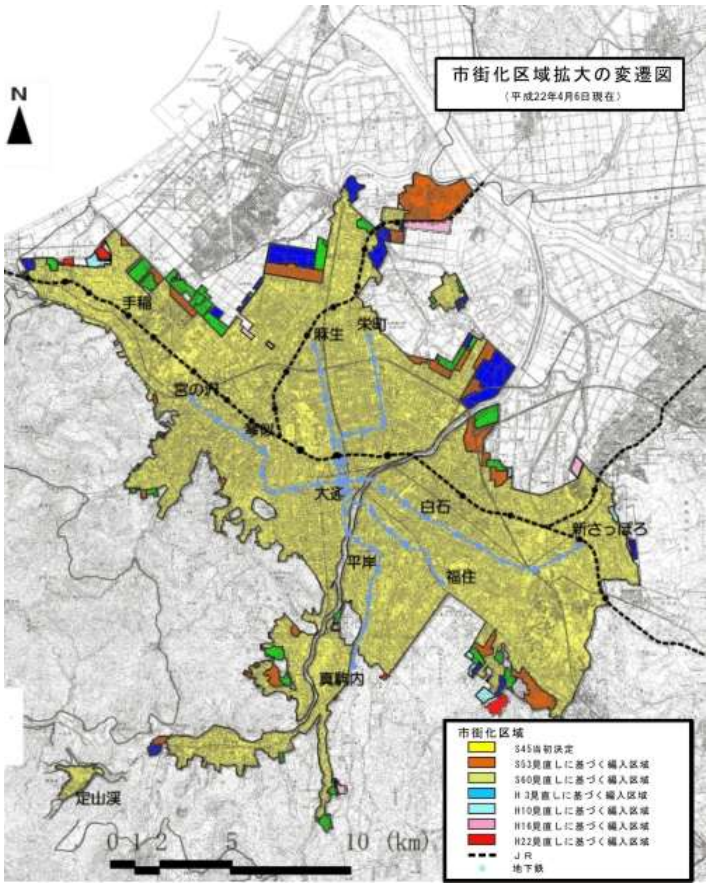
札幌市全市域は1,121.12㎢あり、そのうち南西部の国有林を除く567.95㎢、全市域の約50.7％が都市計画区域となっている。

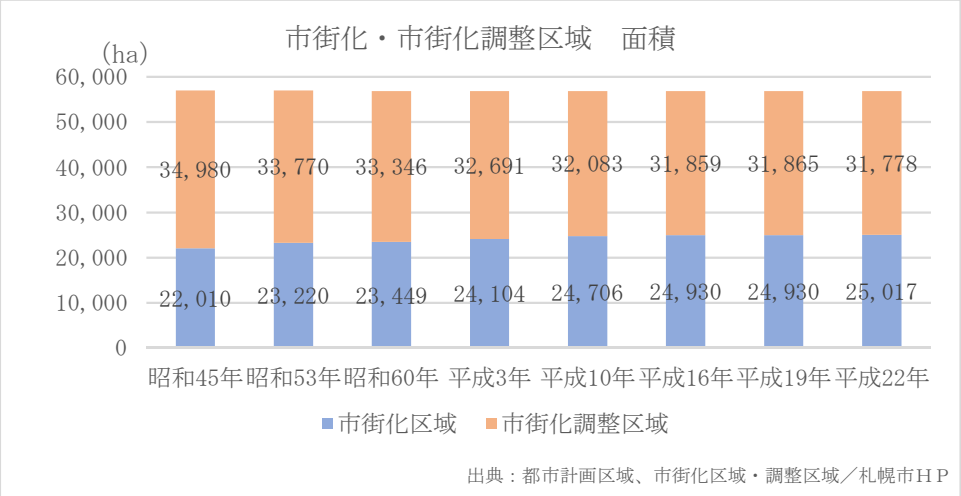
札幌市の景観や地形の特性、自然環境などを踏まえ、住宅市街地、札幌市中心部、工業地・流通業務地、幹線道路等沿道への土地利用の見直しも行いつつ、魅力ある都市づくりを目指している。



地目別面積の状況（土地利用状況）

	宅地	農地	山林	池沼	原野	鉱泉地・牧場	軌道用地	雑種地	免税点未満	※非課税地
平成24年	135.39	24.64	86.29	0.05	12.02	0	2.11	26.80	46.94	786.88
平成25年	135.73	24.19	86.17	0.04	11.88	0	2.11	26.87	47.13	787.00
平成26年	136.08	23.91	86.14	0.04	11.92	0	2.11	26.92	46.96	787.04
平成27年	136.35	23.62	85.95	0.04	11.96	0	2.11	27.16	46.57	787.50
平成28年	136.67	23.15	85.96	0.04	12.09	0	2.10	27.34	46.34	787.55
平成29年	137.12	22.71	85.86	0.04	11.92	0	2.10	27.10	46.09	788.32





＜参考文献＞

・土地利用計画制度の運用方針（平成30（2018）年6月14日改定）／札幌市ＨＰ

・第2次札幌市都市計画マスタープラン（平成28年3月策定）／札幌市ＨＰ

・札幌市景観計画／札幌市ＨＰ

・市街化区域拡大変遷図／札幌ＨＰ

・区統計データ／札幌市ＨＰ

３． 歴史的環境

古代

①旧石器文化

■年代

1 万年以上前

■文化の特徴

人々は、土地を移動しながら、バイソンやシガゾウなどを狩猟する生活をしていた。狩猟用道具や生活の道具として、黒曜石や頁岩、メノウなどを使って道具を製作していた。槍先形尖頭器（やりさきがたせんとうき）や細石刃（さいせきじん）など、技術の高さがうかがわれる。

■地形・地質等

2 億年前、現在の北海道のあたりは一面の海で、約 1 億 4000 万年前に東の北米プレート（オホーツク古陸）と西のユーラシアプレート（西方古陸）が近づき始め、やがて衝突して一つの島となり、火山活動を繰り返し、やがて大陸となっていった。

2400 万年前の新第三紀、北海道は多島海となり、札幌地域も海水を被り海の生物たちがすむようになった。160 万年前の更新世になると、定山渓地域は再び陸化するが、北部低地帯から現在の野幌丘陵地域はまだ海面下にあった。約 21 万～14 万年前の北海道は、湖となっていた日本海をとりまくアジア大陸の一部だった可能性が高いとされ、20～30 万年前には北海道にも人（原人）が住み始めたと言われている。

約 7 万～1 万年前は現在の宗谷海峡や間宮海峡がなく、大陸とつながっていたとされる。約 3 万 2000 年前の支笏火山の大爆発は大量の火山灰を降らせ、その後（約 3 万年前）、熱雲軽石流を流出して、札幌の中心部まで流れ着き、月寒台地を形成した。

■主な生息動物

海藻がよく育つ札幌の冷水海には、海生哺乳類で唯一草食性のカイギュウ（海牛）が群れをなし、セイウチやクジラもすんでいた。また、海の動物ばかりでなく、シガゾウやプロクシムスゾウ、バイソン（野牛）も住んでいた。

氷河時代には本州からナウマンゾウ、サハリンからマンモスゾウが北海道の大陸にやってきたと言われている。

■主な化石・遺跡等

◆ サッポロカイギュウ

札幌市内の小学生が 2001 年に豊平川で発見した世界最古の大型カイギュウ（ジュゴン科ヒドロダマリス属）。2003 年から本格的な発掘・調査が行われ、それまで世界最古といわれていた 500 万年前のタキカワカイギュウより古い約 820 万年前に生息し、体長は 7m前後である寒冷系カイギュウ類であることが判明した。現在は札幌市博物館活動センターで展示されている。

◆ クジラ

2008 年小金湯温泉地区（札幌市南区、定山渓の手前）豊平川河床で、およそ 820 万年～1100 万年前のクジラの化石が発見された。札幌市博物館活動センターにて、現在も調査が行われている。

◆ 石器

約１万 6000 年前の石器が、札幌市白石区本通（Ｓ103 遺跡）、豊平区羊ヶ丘（Ｔ464 遺跡）から出土している。

◆ 軟体動物化石

豊平川の中流域簾舞付近の川床で、1600 万年～1100 万年前の巻き貝や二枚貝などが硬質頁岩層から発見されている。

＜参考文献＞

・サッポロカイギュウは世界最古。／札幌市博物館活動センターＨＰ

・100の物語【歴史】／北海道総合政策部ＨＰ

・北海道歴史・文化ポータルサイト ＡＫＡＲＥＮＧＡ

・埋蔵文化財包蔵地一覧（平成30年4月現在）／札幌市ＨＰ

・『北海道の歴史がわかる本』桑原真人・川上淳／亜璃西社

・『北海道の古代・中世がわかる本』関口明・越田賢一郎・坂梨夏代／亜璃西社

・『さっぽろ文庫90　古代と遊ぶ』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

・広報さっぽろ　南区（2008年10月号）

② 縄文文化

■年代

◆ 草創期(?)‥‥1万年～8000年前？

◆ 早期‥‥‥‥‥8000年～6000年前

◆ 中期‥‥‥‥‥6000年～5000年前

◆ 後期‥‥‥‥‥4000年～3000年前

◆ 晩期‥‥‥‥‥3000年～2300年前

■文化の特徴

石器からは石棒や石剣、石偶や装飾などが作られるようになった。さらに、人々は縄目模様の入った土器を作り、食べものを煮たり貯蔵することが可能となった。そのほかにも弓矢や釣り針、銛などの道具を発達させ、狩猟や漁労、採集の技が向上した。また、人の形をかたどった土偶や、動物の土製品も発掘されている。

人々は竪穴住居に定住するようになり、やがて集落、いわゆる「ムラ」ができ、自然と密接した安定した社会だったと考えられる。そのため、道内では貝塚などもみられる。

札幌市で発掘された遺跡の約半数が縄文時代のものである。

■地形・地質等

札幌市と石狩市の境界にある紅葉山砂丘など、札幌の台地に住むようになった。気候が温暖になったことで、植生や動物相が大きく変化し、マンモスなどの大型哺乳類動物も生息できなくなった。

現在の北海道の海岸線ができあがったのは、3000 年前といわれている。

■主な化石・遺跡等

◆ 平岸天神遺跡

現在の天神山緑地を中心とした遺跡。縄文時代中期の代表的な土器形式「平岸天神山式」が見つかった。

◆ N30遺跡

西区二十四軒にある遺跡で、縄文時代後期と晩期のものだといわれている。最も大きな墓の上からは土偶が見つかり、矢じりやナイフなども発見された。

＜参考文献＞

・100の物語【歴史】／北海道総合政策部ＨＰ

・北海道歴史・文化ポータルサイト ＡＫＡＲＥＮＧＡ

・埋蔵文化財包蔵地一覧（平成30年4月現在）／札幌市ＨＰ

・さっぽろの遺跡（埋蔵文化財センター）／札幌ＨＰ

・『北海道の歴史がわかる本』桑原真人・川上淳／亜璃西社

・『北海道の古代・中世がわかる本』関口明・越田賢一郎・坂梨夏代／亜璃西社

・『さっぽろ文庫90　古代と遊ぶ』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

③続縄文文化

■年代

◆ 前期‥‥‥ 2300年前～1700年前

◆ 後期‥‥‥ 1700年（4世紀）～1400年（6世紀）前

■文化の特徴

本州で弥生文化が栄えた頃、稲作文化は北海道へ到達せず、奈良時代頃まで続いたようである。わずかに鉄の道具を取り入れながらも、地域的な相違や時間的な変遷を経て、この時代から北海道は独自の文化形成の道を辿ることとなる。

約 1800 年前、弥生文化の影響を受けた恵山文化と、北海道の北東部で栄えた宇津内文化（オホーツク海沿岸）と下田ノ沢文化（太平洋沿岸）が統合され、道央部の石狩低地帯に新たな「江別（太）文化」が生まれた。この文化の土器は、河川でのサケ・マス漁を主な生業としていた人々により作られた後北式土器で、口縁部の突起や器の外側を飾る縞縄文が特徴である。

■主な化石・遺跡等

◆ K135遺跡

現在のＪＲ札幌駅の地下にあった遺跡。サケの骨やたき火の跡などが見つかっている。

◆ K39遺跡（ポプラ並木東地区地点）

北区北 18～19 条西 11～13 丁の北海道大学構内から出土したガラス玉と不整楕円の土坑墓（5～7 世紀前半）で、その大きさから屈葬と考えられる。そのほかにも北海道大学構内の遺跡や出土品は多く、その土器を示準として「北大式期」と名付けられている。

K39 遺跡からは、サクシュコトニ川遺跡など擦文期の木製品や鉄片なども数多く出土している。

＜参考文献＞

・100の物語【歴史】／北海道総合政策部ＨＰ

・北海道歴史・文化ポータルサイト ＡＫＡＲＥＮＧＡ

・埋蔵文化財包蔵地一覧（平成30年4月現在）／札幌市ＨＰ

・さっぽろの遺跡（埋蔵文化財センター）／札幌ＨＰ

・北大キャンパス内の遺跡／北海道大学埋蔵文化財調査センターＨＰ

・郷土史ていね 第120号（平成29年12月13日）／手稲郷土史研究会会報

・『北海道の歴史がわかる本』桑原真人・川上淳／亜璃西社

・『北海道の古代・中世がわかる本』関口明・越田賢一郎・坂梨夏代／亜璃西社

・『さっぽろ文庫90　古代と遊ぶ』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

④擦文文化

■年代

- 早期・・・・・1400年（7世紀）～1200年（8世紀頃）前
- 前期・・・・・1200年～1100年（9世紀頃）前
- 中期・・・・・1100年～1000年（10世紀頃）前
- 後期・・・・・1000年～900年（11世紀頃）前
- 晩期・・・・・900年～800年（12世紀末頃）前

■特徴

8 世紀頃になり、擦文文化は本州の社会や文化の影響を強く受けて成立したと考えられるが、竪穴式住居と土器の使用は続いていた。しかし、栽培種の種子も見つかっており、続縄文文化には少なかった本州との交易や農耕の広がりが認められる。

擦文土器は本州の土師器の影響を受けており、表面に木のへらで擦ったような跡が残っていることから擦文文化と呼ばれている。鉄器も普及し、木器や樹皮製品の製作技術も進展していた。また、古墳の影響を受けたと考えられる北海道式古墳が出現している。

12～13 世紀頃に、オホーツク海側の人々の文化として知られたオホーツク文化と一体化し、アイヌ文化へと移行していった。

■主な化石・遺跡等

- Ｋ446遺跡

  北区麻生町で見つかった竪穴住居で、擦文時や須恵器、ド製品、などが見つかった。

- Ｈ317遺跡

  東区丘珠町である続縄文～擦文時代の遺跡である。竪穴住居やたき火の跡、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀類とともに、オオムギやコムギなどの種子も見つかっている。

＜参考文献＞

・100の物語【歴史】／北海道総合政策部ＨＰ

・北海道歴史・文化ポータルサイト ＡＫＡＲＥＮＧＡ

・埋蔵文化財包蔵地一覧（平成30年4月現在）／札幌市ＨＰ

・25年度 市町村の発掘調査概要／北海道教育委員会ＨＰ
・『北海道の歴史がわかる本』桑原真人・川上淳／亜璃西社
・『北海道の古代・中世がわかる本』関口明・越田賢一郎・坂梨夏代／亜璃西社
・『さっぽろ文庫90　古代と遊ぶ』札幌市教育委員会／札幌市・札幌市教育委員会

中世～近世

①アイヌ文化期

■年代

- 中世‥‥‥鎌倉時代（1192年）以降
- 近世‥‥‥江戸時代（1603年）以降

「札幌」の語源については諸説あり、アイヌ語の「サッ・ポロ・ペッ（乾いた・大きな・川）」や「サリ・ポロ・ペッ（湿原が・広い・川）」という説などがある。

札幌が歴史上に姿を現したのは、1669(寛文9)年から翌年にかけて起こったアイヌ民族と和人との戦いに関する津軽藩の史料が最初だとされている。事件当時の石狩地方には、アイヌ民族の首長が率いる地域集団も存在していた。やがてこの地域集団は、松前藩の力によって次第に解体させられていった。

■石狩十三場所の成立

石狩川流域は、早くからサケが豊富に獲れるところとして知られ、その多くはアイヌ民族の食糧としての干鮭（からさけ）に、あるいは塩引きに加工されて本州方面に送られていった。17世紀後半に、石狩地方にも藩士に知行の代わりに与えるところの商場（あきないば）＝交易場が設定された。やがて18世紀に入ると、これを特定の商人に運上金を納入させて場所の経営を任せる場所請負制が導入された。これにより、札幌市域を含めて石狩十三場所（上サッポロ、下サッポロ、上ツイシカリ、下ツイシカリ、ナイホ、シノロ、ハッサムなど）が成立、夏商（干鮭、毛皮など）・秋味商（塩引鮭）を通じてアイヌ民族との交易を盛んにし、本州からは鉄製品をはじめ古着や装飾品などが多くもたらされた。

■石狩役所の設置

1799（寛政11）年、対ロシア問題から東蝦夷地が幕府直轄となり、ついで1807（文化4）年、西蝦夷地も直轄された。1821（文政4）年、蝦夷地は松前藩に復領されたが、1855（安政2）年に、幕府は北方問題の一層の緊迫化に対応するため、再び蝦夷地を直轄し、箱館奉行を置いて統括させた。この再直轄は樺太情勢を主要因としていたために西海岸が重要視され、その中でも大河が流れ、東西蝦夷地交通の要衝であり、また広大な平野を持つ石狩地方がその中心となった。このため、同年に石狩役所が設置され、1857（安政4）年には銭函から豊平、千歳を経て東蝦夷地の勇払を結ぶ札幌越新道が開かれ、この豊平川畔にはのちに吉田茂八、志村鉄一が渡守として住んだ。さらに1858（安政5）年には石狩の場所請負を廃して函館奉行の直支配とし、より強力な行政体制を敷いた。

■農業開拓のはじまりと大友堀

こうした中で札幌の農業開拓が始まった。まず1854（安政4）年から発寒、星置などが在住性※によって拓かれ、このうち発寒村は明治まで続いた。ついで石狩役所の責任者である荒井金助が自費で農民を招募して荒井村を開き、在住村である中島村と合併して篠路村とな

った。しかしこれらは、農民に対して米など食糧の扶助を主体とする小規模のもので、成果もおのずと限界があった。このため箱館奉行は年間3000両を投じ、農業基盤整備を十分に行って一層の開拓の振興を図ることとし、1866（慶応2）年、まず大友亀太郎を担当者として現在の東区に御手作場（直営農場）を設置させた。そのとき開削した用悪水路のひとつが、後にその一部が創成川の一部となる大友堀である。こうして幕府の崩壊時には、発寒・琴似・星置・篠路・札幌（御手作場）の村々があり、農業が営まれていた。中でも早山清太郎は、1858（安政5）年に稲作に成功した。こうした中で、アイヌ民族にとっては、依然として苦しい生活が続いた。

※在住性とは、士分の者が手当てを得て入地し、農民を召募して開拓するもの

※アイヌ語地名について詳しく記載

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

・札幌市の概況2018（ポケット統計）／札幌市ＨＰ

・札幌公式観光サイト　ようこそSAPPORO

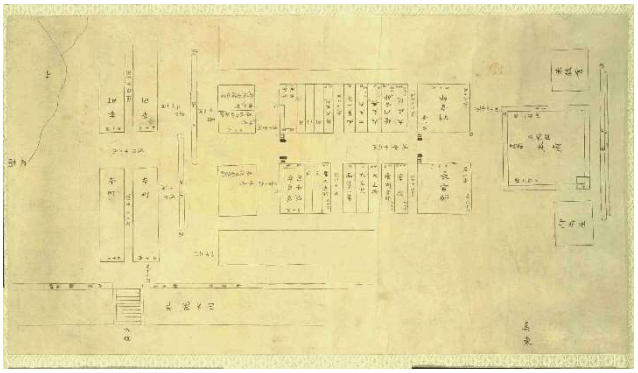
近代以降

①明治

■開拓使の設置

1869（明治2）年7月8日に開拓使が設置された。初代長官に鍋島直正、判官に島義勇・岩村通俊が任命され、石狩辺に本府を置くことになった。次いで8月15日、蝦夷地は北海道と改称され、国郡も設定された。本府建設の準備を命じられた島判官一行は、10月12日銭函に到着し、その直後から本府地の選定と豊平悔恨を開始、札幌を本府建設地とした。そして11月中旬から官舎官宅の建設を開始した。

■島判官の描いた本府構想



石狩国本府指図　出典：北海道大学付属図書館

島判官は、円山のコタンベツの丘から広がる大地を見下ろし、街づくりの構想を練ったといわれている。石狩国本府指図※に描かれた島判官の本府構想では、まず現在の札幌の中心部に、北端に300間四方の本府（本庁）敷地、その南側中心から南北の道路を通し、その道路の両側に長官邸をはじめとする官宅・病院・学校・役所などを配置した。それらの南端に幅42間の空閑地を東西に帯状にとり、そこに二筋の土塁を設け、その南側に本町を配置した。これらを現在の札幌に当てはめると、南北の道路は南から北へと流れる創成川東岸の道路、空閑地は大通となる。この計画は途中まで実行され、創成川東岸で大通の南端に大門を設け、北部を官庁・官宅街、南部の本町には商工業者を入地させて民地とした。さらに西方に御宮を配置し、琴似・発寒・篠路・札幌の既存の村と新設の豊平村を周辺に配置しようとした。しかし雪と寒さに加え、食料や予算の不足もあって、北海道西部13郡の経営は困難を極めた。さらに、東久世通禧長官が、西部13郡の場所請負人廃止と

漁場の開拓使直営などを島判官の独断専行と判断したためか、その報告を受けた政府は、島判官を東京に召喚後転任させた。

■岩村判官が受け継いだ本府建設

先に島判官によって計画募集された移民は続々と札幌付近に移住し、庚午一の村（苗穂）・庚午二の村（丘珠）・庚午三の村（円山）などができた。1870（明治3）年9月に東久世長官・黒田清隆次官らが札幌を視察して、島判官の雄大な構想を改めて認識し、正式に1871（明治4）年から札幌への本府建設が決定した。同年に札幌に赴任した岩村判官らは、移民の招致、道路工事、市外の測量などに着手すると共に、島判官の構想を一部変更し、開拓使庁舎や官邸、役所の建設を再開した。市街地は11間幅（約20m）の道路を南北に交叉させる碁盤の目状とした。その基本的なブロックは、60間四方（3600坪：約11,880㎡）とし、6間幅（約11m）の中通りを設けた。そして幅3尺の側溝を道路両側に付けたり、市内最初の公園でかつ農業試験場である偕楽園の建設、最初の官立学校である資生館設置など近代的色彩も濃いものであった。その一方で市街地に隣接して遊郭を設けたり、移民に割渡した区画も標準が間口5間奥行き27間（135坪：約446㎡）の短冊型であるなど、近世都市の様式も取り入れていた。しかし、これらの建設も1873（明治6）年に一段落すると、工事人夫たちの離札と共に、札幌は公共投資欠乏のため市中に大不況が襲い、庶民の生活は困窮し、逃亡者が多く出て、生活基盤のない人工都市の側面も露呈した。

地図

■各村の行政区域の確定と札幌本府の境界の決定

1871（明治4）年以降、平岸・月寒・白石・手稲などへ移住が行われ、1874（明治7）年2月、本府に隣接する琴似、山鼻、札幌（元村）、円山、篠路、豊平、白石および苗穂の各村の行政区域が確定した。こうして、本府の外周線は決定し、他動的に札幌本府（区）の境界が決定した。

■屯田兵制度の制定

1874（明治7）年、屯田兵制度が制定され、翌年1875年には琴似に、1876年には山鼻・発寒に入植した。

この頃には、中央政府の殖産興業政策にならい、札幌にも生糸・みそ・しょうゆ・ビール・諸機械などの官営工場が続々と建設され、開拓使では、これらの原料となる農産物を農民に奨励した。しかし、農民は、米についての強い執着および農業に必要なわらの供給や生活習慣などから稲作への思慕を捨て去ることが出来ず、稲作の努力を続け、明治10年代中頃から札幌付近でも作付けされるようになった。

■交通網の整備

1873（明治6）年、函館～札幌間の札幌本道の開通、1873（明治12）年、小樽～銭函間道路の開通、翌1874年、札幌～手宮間の鉄道も開通し、道庁時代初期にかけて交通網が整備され

ていった。

■開拓使の廃止

1882（明治 15）年、開拓使が廃止され、北海道は札幌・根室・函館の三県に分離された。この頃の札幌区郡の人口は 18,123 人、戸数は 4,630 戸であった。

■環境の整備

多年にわたり洪水を起し、その度に大きな被害を与えてきた豊平川に堤防が 1884（明治 17）年に完成した。さらに翌年には市民の要望の強かった市中の大下水網が、南 6 条～北 1 条間の西 5 丁目（後に新川とよばれる）を皮切りに、道庁時代初期にかけて開削され、整備された。そして区市街の総代人会で地主のアカシア・さくら・やなぎなどの街路樹の植え付け管理が可決されるなど、現在の環境整備や都市基盤整備に当たる政策が実行に移されていった。

■北海道庁の設置

三県制度は、明治 19 年に廃止となり、北海道庁が札幌に設置され、函館、根室に支庁が置かれた。初代長官には、岩村通俊が命ぜられた。岩村は、北海道への資本の導入に努力し、官営工場の払下げとともに、札幌での民間工業の発展を促した。また、道庁時代初期には札幌周辺の開拓のため、現在の新川である大排水路などを開削し、鉄道線路以北の湿地帯の開発を促進させ、1887・1888（明治 20・21）年の新琴似屯田、1889（明治 22）年の篠路屯田などを入植させた。

■生活環境の整備と札幌大火

明治 20 年代の札幌区内は、札幌県時代から引き続き、下水施設の整備、市街道路や周辺村落との連絡道路の砂利敷き改良など生活基盤の整備を行った。また、都市衛生の観点から、汚水・し尿処理や市街清掃・塵芥処理など生活環境の整備にも目が向けられるようになった。当時の札幌は、全道各地への労働力供給地となっていた。

1892（明治 25）年、札幌は大火に見舞われ、区役所、地方裁判所、銀行、警察署、新聞社など 887 戸が類焼した。この年は、北海道物産共進会を開催する予定でいただけに、その打撃は大きいものがあった。

■遠友学校の開設

1894（明治 27）年、新渡戸稲造と彼の支持者によって遠友学校が開設された。これは、貧しい人々や昼間学ぶ機会のない人々に教育の門戸を開いたものであった。さらにこの頃は、禁酒会など社会改良運動や県人会運動などの社会運動・活動が盛んになった時代でもある。

1899（明治 32）年頃からは、教育の充実が取り上げられ、女子教育充実のために庁立札幌高等女学校が設立され、1907（明治 40）年には、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった。

■北海道区制と札幌の人口

1899（明治 32）年、札幌は、函館・小樽とともに北海道区制が施行され、はじめて道庁による官治時代を脱して、自治時代に入ることとなった。当時の札幌区の人口は、40,578 人、戸数 7,009 戸であった。

これより先、北海道二級町村制が1902（明治35）年に手稲・豊平・白石・札幌各村、1906（明治39年）年に琴似・藻岩・篠路各村に施行された。市域の発展に伴い、1910（明治43）

年には豊平・白石・札幌・藻岩の各町村の一部が札幌区に編入され、区の人口もおよそ9万人を数えるに至った。

札幌区の人口は日露戦争前後より増加傾向を示し、札幌は北海道庁その他諸官庁の所在地として、いわば「月給取り」の街・一大消費都市として発展し続けた。1909（明治 42）年、札幌区が実施した「札幌区区勢調査」で、区民の半数以上が 1904（明治 37）年以降の移住者であり、区民の 8 割が借地借家住まいであることなど、札幌が人の入れ替わりの非常に激しい街であることがわかった。また札幌の地価は他都市と比較して高額であり、地代家賃は高かった。

地図

※このころの地図を掲載

■日露戦争の影響

1904・1905（明治 37・38）年の日露戦争は、札幌の市民生活を大きく変化させた。まず、社会改良的運動であった社会活動は、戦争を機に出征軍事家族救護の名のもとに、さまざまな救護団体を生み、活動するようになった。そして、この時期には食生活にも徐々に変化が見られ、牛乳、肉、卵など栄養価の高い食物も一部の人びとから広まりつつあった。西洋料理にも工夫を凝らすようになり、スープ、アイスクリーム、ミルクソーダなども加わった。また、札幌初のデパートが開業し、女店員を採用したり、映画の常設館が開業するなど札幌の顔が増えていった。豊平館を公会堂として使用することや、大通りを逍遥地として利用することが許されるのもこの頃からである。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

②大正

■開道五十年記念北海道博覧会の開催とその影響

1918（大正 7）年は開道 50 年に当たる年で、記念事業として博覧会が開催され、入場者は、1 か月半の期間中に 140 万人を数えた。当時の全道人口が 217 万人であるから、その盛会ぶりがうかがえる。札幌は、広く全道、全国に紹介され、会場に隣接する山鼻地区は急速に開けていった。この博覧会を契機に、市内馬車鉄道が廃止され、電車となった。農科大学が東北帝国大学から分離し、北海道帝国大学となったのも同じ年であった。

■第一回国勢調査と札幌市の人口

1920（大正 9）年、第 1 回国勢調査が実施され、札幌の人口は 102,580 人を数えた。市制が施行された 1922（大正 11）年 8 月 1 日には、札幌市の人口は 127,044 人、戸数は 22,915 戸、面積は約 24 ㎢であった。大正時代は区制が充実し、市制の施行により自治制の進展期であるとともに、産業の振興期でもあった。

■第1次世界大戦と北海道庁の動き

1914（大正 3）年にはじまる第 1 次世界大戦は、市民生活にさまざまな影響をもたらした。農産物を中心とする海外輸出は急激に増加し、このため札幌の周辺農村は、異常な好景気に

包まれ、札幌市街の商店街では古着や子どものおもちゃがよく売れた。

1918（大正 7）年のシベリア出兵に際し全国各地で米騒動が起こり、札幌でもそのあおりを受けて米価が急騰した。また大戦中から大戦後にかけての景気の変動は、物価高騰による生活不安を訴える人々を多く輩出させた。北海道庁が 1921（大正 10）年に社会課を設け、社会事業を公的に推進したのを受けて、札幌区は、区営住宅建設・公設市場・職業紹介・窮民救助その他の社会事業的業務を分担し、これが翌年の社会係設置につながった。

■戦後の市民生活

第一次大戦後の国民生活の改善を図ることを趣旨に北大教授の森本厚吉を中心に文化生活研究会が設立され、「文化住宅」、「文化台所」など「文化」が喧伝された。また道庁主催で生活改善展覧会が各地で開催されて、生活の見直しが図られたり、美術展、音楽会も盛んに催されるようになった。

さらに 1923（大正 12）年、都市計画法適用、1926（大正 15）年、市街地建築物法適用など札幌市へも都市計画関係法が適用されて、昭和に入り本格的な都市計画事業が実施されていった。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

③昭和

■次々と行われた都市計画事業

1927（昭和 2）年、都市計画区域が札幌市だけでなく豊平、琴似、藻岩、白石、札幌の 1 町 4 村の一部を含む広大な地域に設定された。その後、都市計画による事業（街路整備・風致地区整備、公園整備など）に加え、上下水道の整備、道路の整備、市営バスや札幌飛行場など交通体系の整備などさまざまな事業が順次行われた。

また、この頃からカフェーが増加し、映画館が繁盛する一方で、スポーツも次第に盛んとなった。そのため、1929（昭和 4）年に中島公園にプールが設置され、1931（昭和 6）年には大倉シャンツェが竣工し、1934（昭和 9）年、円山に総合グラウンドが竣工した。

■増加する札幌市の人口

1940（昭和 15）年に実施された第 5 回国勢調査で、札幌市は人口が 20 万人を突破し、函館市を抜いて人口で全道一の都市となった。翌年には円山町を合併し、人口 224,729 人、世帯数 45,488 世帯となった。

■日中戦争と市民生活

1937（昭和 12）年の日中戦争ぼっ発は、札幌市民へも大きな影響を与えた。次回の開催が決定していた冬季オリンピックの返上もその一つだが、新聞でも出征兵士の見送り、金品や物資の供出や倹約などを盛んに宣伝した。

■太平洋戦争と市政

太平洋戦争のぼっ発は、市政の上に大きな影響を与えたばかりでなく、市民は窮乏生活を営むことを余儀なくされ、戦争協力のために各方面に動員された。すでに戦時協力のための住民組織である公区制がしかれ、市民は食糧をはじめとする物資の配給は、公区の隣組を通

じてしか手に入らない状況となり、食糧の不足を補うため野草採りや家庭菜園が奨励された。また出征した男性の代わりに女性が労働力として動員され、女子挺身隊の名で軍需工場などで働いた。

1945（昭和 20）年、米軍による大都市空襲は次第に地方都市にまでおよび、札幌近郊も被害を受けた。やがて、広島・長崎への原子爆弾の投下があり、敗戦を迎えた。

■戦後の札幌

1945（昭和 20）年 10 月には敗戦にともない札幌にも占領軍が進駐し、豊平館をはじめ大きな建物、円山総合運動場などの施設が接収された。この年は全国的に大凶作となり、主食糧の配給も不足しがちで、「食糧問題が市政の最重要事」といわれるほどであった。

翌年は食糧不足をはじめとする諸物資の不足でヤミ値を生じさせるとともに、インフレが発生した。札幌でも狸小路の創成川縁一帯にヤミ市ができ、生活必需品を求める市民が集った。また外地からの引き揚げや疎開者の復帰などは、出生の増加とともに、札幌市の人口を急増させ、住宅不足の状況となった。

■民選による札幌市長の誕生

1947（昭和 22）年、市長が初めて公選となり、民選市長のもと市民と一体となって市民生活の再建と新しい都市づくりを進め、市の機構も部制が敷かれて 1 局 5 部 24 課となった。食糧問題や引き揚げ者受け入れなど山積する問題をかかえた市は、翌 1948 年、警察制度、消防制度の改革によって自治体警察、自治体消防が発足し、札幌警察署および消防本部が設置された。1949（昭和 24）年、札幌市は創建 80 周年、自治制施行 50 周年を迎え、盛大な記念式典が挙行された。

■北海道の開発計画

1951（昭和 26）年、北海道開発局が設置され、翌年、北海道総合開発計画第 1 次 5 カ年計画が策定された。開発計画の推進に伴い、大資本を背景とする本州の有名商社が札幌市に集中してきたため、都市規模が急激に拡大してた。

■100万人を超えた札幌市の人口

徐々に経済安定の兆しも現れ、食糧事情も好転し、市民生活も安定の方向に向かった。1950（昭和 25）年には、第 1 回雪まつりが開催され、その後市民の冬のレクリエーションとして定着した。

昭和 30 年代、高度経済成長期の全国的な都市集中傾向は、北海道における中心都市である札幌市で特に顕著となり、道内石炭産業の不振から生じた炭鉱離職者の札幌市流入とかさなって、人口は 1965（昭和 40）年に 794,908 人で 1955（昭和 30）年から 37 万人も増加し、1970（昭和 45）年には 1,010,123 人となり 100 万人を超えた。周辺町村のベッドタウン化がすすむとともに、1955 年には札幌村、篠路村および琴似町と合併、1961（昭和 36）年には豊平町、1967（昭和 42）年には手稲町と合併し、面積 1,117.98 ㎢となった。

地図

※このころの地図を掲載

■札幌オリンピックと発展

札幌オリンピック開催が決定すると 1967（昭和 42 年）には「札幌市建設 5 年計画」が策定された。オリンピック関連施設の整備事業などに国や道の資金も札幌都市建設や社会資本整備に投入されたため、一都市での財政規模以上の都市建設・都市整備が実現した。市役所新庁舎、都心部地域暖房、地下街、北海道厚生年金会館などが相次いで完成、1971（昭和 46）年に開通した地下鉄南北線、そしてオリンピックを目指した民間資本の建設ラッシュと相まって、都心部の様相は一変した。そのため札幌はオリンピックを境にその景観が一変したと言われるようになった。

1972（昭和 47）年に開催されたアジアで初の冬季オリンピック大会は、成功裏に終了した。

■姉妹都市提携と政令指定都市・札幌

札幌市の急激な発展は、国際的にも注目を浴びはじめ、1959（昭和 34）年、米国ポートランド市と姉妹都市提携の盟約を交わした。その後も 1972（昭和 47）ミュンヘン、1980（昭和 55）年瀋陽、1990（平成 2）年ノボシビリスクと姉妹都市や友好都市の盟約をむすんだ。

1972（昭和 47）年 4 月には、川崎、福岡両市とともに政令指定都市に移行し、中央・西・北・東・白石・豊平・南の 7 区体制となった。

■石油危機と札幌市の人口増加

1983（昭和 48）年 10 月の中東産油国の一斉値上げに端を発した石油危機は、世界経済を混乱させた。札幌でも、スーパーのトイレットペーパー販売に行列をつくるなど、市民生活へも少なからぬ影響を及ぼした。

昭和 50 年代に入ると、長期的な経済不況による影響などから札幌市の人口増加は鈍化傾向となっていたが、道内景気の回復とともに安定した増加を続け、1988（昭和 63）年には人口 160 万人に達した。

■人口の急増と都市問題

人口の増加による住宅地の広がりや道路整備による舗装道路の広がりは、それまで地下に浸透していた雨水までも下水道に流し込むことになり、下流の下水道からあふれ出る都市型水害を起こすようになってきた。1975（昭和 50）年や 1981（昭和 56）年の洪水などは、大雨や台風による石狩川や茨戸川の氾濫に加え、それらの雨水を引き受けた下水道の下流地域での噴出なども起こり浸水被害を大きくし、典型的な都市型水害でもあった。このような都市問題への対処も求められるようになってきた。

■札幌の交通

1971（昭和 46）年 12 月を皮切りに開通した地下鉄とその主要駅は、乗り継ぎ駅としてバスターミナルなどを整備した。国鉄およびＪＲでは、千歳線の切替による新駅の整備、郊外での住宅地の広がりに対応して森林公園駅開設をはじめとして既存の駅の間に新駅を設けるなど札幌とその周辺との交通の便を拡充した。さらに札幌市の南北の連絡を阻害していた函館本線の高架事業が行われた。これにより札幌の南北の交通を分断していた踏切が無くなり、北方への発展が促進された。それにともない広域道路網は、都心部に集中する国道などの主要道路について、バイパス道路の整備、都心から郊外へ向かう放射状道路、都心を取り巻く環状道路を整備し再編成を行った。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ

④平成

■札幌の行政区域

札幌市の人口は、増加数が年々小さくなってきたものの、2018（平成 27）年には 195 万人に達した。その間住宅地はさらに広がりをみせ、平成元年西区と白石区を分区してそれぞれ手稲区と厚別区を設置し、1997（平成 9）年に豊平区を分区して清田区が設置され、10 区体制となった。

■イベントと国際化

1986（昭和 61）年と 1990（平成 2）年のアジア冬季大会、翌年のユニバーシアード冬季大会、1990（平成 2）年から行われているパシフィック・ミュージック・フェスティバル（ＰＭＦ）、1999（平成 11）年中央アジア非核兵器地帯国連札幌会議など国際的なイベントや会議を開催し、国際コンベンション都市となっている。また雪まつりやＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭りなどの市民の手作りで始まったイベントも外国からの参加団体が増えて、国際的なイベントになっている。

■札幌市のまちづくり

札幌駅周辺の整備も進み、ＪＲタワーの建設、大丸デパートや電気製品の大型量販店など大ショッピングセンターの開業に加え、札幌駅北口方面の開発も進み、エルプラザや国の合同庁舎建設などがあいつぎ、札幌の集客の中心が大通南 1 条から札幌駅周辺にかわった。

1992（平成 4）年には「魅力ある都市景観について」などの『街づくりサッポロ会議提言』が出された。また、2000（平成 12）年策定の『第 4 次札幌市長期総合計画』により、時代の変化に合わせた見直しがなされている。2004（平成 16）年からは、「街づくり市民会議」が設置され、札幌市の素案を検討した『札幌新まちづくり計画に関する提言』をふまえた『札幌新まちづくり計画』が策定された。

最近の札幌市では、政策や事業の決定のために多くの部署が、パブリックコメント、フォーラム、シンポジウムなどより多くの市民の意見をふまえる取組を行っている。また役所の各部署は、パンフレットの発行やホームページなどで市民へ向けて情報発信している。

■札幌の防災・公害対策

阪神淡路大震災とその後の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故を契機に、札幌市地域防災計画を抜本的に見直し、地震災害対策編、風水害対策編、雪害対策編、事故災害対策編、原子力災害対策編などを含んだ計画に改定した。

また、避難場所や応急救援備蓄物資の整備のほか、市民や地域の防災力（自助、共助）や防災意識を高めるため、自主防災活動への支援や防災普及啓発に取り組んでいる。

■今後の札幌市

今後も札幌市は、国際化の進展、高齢化の進行、さらに情報化といった社会的変化に対応しつつ、都市化の進展がもたらすさまざまな問題を考慮しながら、21 世紀の都市づくりを進めていく必要がある。

＜参考文献＞

・札幌市政概要／札幌市ＨＰ